
ベッドからこんにちは

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベッドからこんにちは

【Nコード】

N1222Q

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

洋画で見るようなダブルベッドに寝る夫婦。夫は憧れていたのだ。
った。

郊外の一戸建てをやつとローンで買うことができた。

四十五歳の夫と四十三歳の妻。子どもは大学生になった一人娘が今春県外の大学に行った。だから、二人でのびのび使うベッドを買いに来たのだ。

「ねえ、初めて買うベッドがダブルってどうかしら」

「憧れていたんだ。寝室にダブルベッドを置くの」

妻の方は布団が楽よと言いながらも、夫が新しい家に置いてみたいというのも分かる気がして渋々承諾していた。店員はこれなら腰が痛くなったりしませんし、何より布団の上げ下ろしが無いのはこれから楽ですよ、しきりと高いベッドを勧めていた。

ベッドは夫婦の寝室に運ばれた。

初めての夜。

「おい、ベッドってあったかいものだなあ」

「そうねえ、空気が間にあるからかしら」

「今までの安普請の家と違って、ダブルベッドが似合うじゃないか」

「やつと買った建売住宅も、この寝室が本当に素敵ね」

「ああ、クローゼットなんてあるし。この間接照明もムードあるな」

夫婦は見つめあいながら初めてのよう抱き合って眠った。

翌日、夫と妻はそれぞれ無口になっていた。

夫は今まで布団で寝ていたからこのスプリングというものに慣れてはいない。妻も、夫の腕枕で首の筋を違えていた。しかし、いずれ慣れるんだからと黙っていた。

「じゃ、行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

妻は仕事が休みだった。妻は学校の事務職員だった。昨日は参観日のため今日は代休だ。仕事の後に二人で家具店で選んだ。

妻はベッドに跳び込んだ。

「こうやって子どもみたいにベッドに入ってみたかったわ」

ピョンピョンはねると、スプリングの音がした。だが、すぐに、悲鳴を上げた。

「いたーい」

忘れていたのだ。首の筋を違えていたことを。

「そうよ、二人で朝まで同じ布団で寝るのは新婚旅行以来だわ」

狂おしいほどのめくるめく感動のはずが、こんなに疲れて眠った感じがしないなんて。

二人で寝るより一人で寝たい。磁気ネックレスを探して胸元に飾る。ふと、ちよつとだけ昼寝をしようとまたそつとベッドにもぐりこんだ。

一方、夫は会社で腰が疲れていた。固い布団ですつと寝ていた体は、スプリングで微妙にゆがんだかのようだった。あれほど、洋画でみるようなベッドの生活に憧れていたのに、そのベッドで疲れるとは言えなかった。いつも頑丈な腕で妻を抱き寄せるヒーローのように、年老いても一緒にベッドで寝るんだと決めたはずだ。だが、たった一日で腕も痺れていた。妻の頭があんなに重いなんて初めて知った。

朝食では二人とも妙に無口だったことも思い出した。妻は喜んでいるのだろうか。

「いや、あいつのことだからきつと合わせてくれたんだ」

妻は布団がいいのにつて言ってたが、説得したのは自分だと思いつと夫は大きいため息をついた。

会社ではみんなが新しい家はとうですかと尋ねてきて、羨ましいと言われると誇らしい気持ちにもなった。だが、今夜もベッドで寝ると思うといささか憂鬱だった。

磁気貼り薬を買って、トイレで昼休みに貼る。両肩と妻の頭を乗せた左腕が痛い。すると、トイレに部下の鈴木が入って来た。

「あれ、課長、どうしたんですか」

「いや、凝っちゃってね」

「うわあ、参っちゃうなあ。すごい精力ですね」

勝手に想像を膨らませている鈴木を違うというのも面倒なのでニコツと笑って見せた。部屋に戻ると、みんながニヤニヤしている。鈴木が精力うんぬんを言ったに違いない。

部長までが、わざわざ席を立ててやって来た。

「おい、新しい家になったら奥さんが喜んでるんだろう、この野郎」と、笑いながら小さな声で言う。

「えっ、そんなことはありませんよ」

こちらにも笑いながら答えるが、首や肩を回すたびに、若い女性社員は眉間にしわを寄せる。違うつてばと言いたい気持ちになる。

帰り道に花屋の店先にパンジーが並んでる。寄せ植えの鉢が五百八十円と書かれている。夫は一鉢求めて家に帰ると、玄関の横に置いた。なかなか可愛らしくていい感じた。妻も喜ぶに違いないと夫は思った。

「ただいま」

返事がない。

買い物に行ったのかと二階へ上がる。

寝室のドアを開けると、妻がすやすや眠っている。首にはこの前通販で買ったという磁気ネックレスがある。気配に気付いて妻が目覚めます。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい。つい寝ちゃって」
妻も同じだったのかと笑う夫だった。

「よく眠れましたか」

「ふふふ、ごめんなさい。二人で寝ることに慣れてないから」
「実は俺もだ」

二人ともそうだったのかと、夫婦はベッドに腰掛けてお互いの肩

こりを確かめる。夫の腕や肩に貼られた磁気貼り薬が見事にたくさんなので妻は嘖き出した。

「あなた、こんなに全部貼ったの」

「ああ、みんなに夜のお努めが激しいと言われたよ」

「やあね」

妻は笑いながら、夫の肩先にキスをした。

「さあ、食事は精力がつくようにニンニク入りキムチ鍋よ」

「おう、それはすごい。でも、ベッドもやっぱり楽しいかもしれないな」

「ええ、慣れるわよ。きつと」

すると、妻のケータイに娘からメールが来た。

『二人で仲良く新婚生活してますか。私は大学の寮で寂しく生活しています』

夫婦はケータイでベッドに腰掛けて写メールを送った。

『パパが買ったダブルベッドの上からこんにちは』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1222q/>

ベッドからこんにちは

2011年1月12日15時55分発行